

## 戦術は二つに一つである

ロシア社会民主労働党中央委員会へ

1905年9月15日

親愛な同志諸君！ 1000 ルーブリ——2640 フラン——と『ラボーチー』第一号を受けとった。『ラボーチー』第一号はすばらしい印象をあたえる。退屈でない平易な叙述という困難な課題が、かなりの程度、この新聞によって解決されるだろうと期待できる。叙述の調子と性格のうえになにか新鮮なものがある。すばらしい戦闘精神。一言でいえば、成功を心からお祝いし、また今後いっそうの成功をいのることができる。さしあたって私はつぎのような部分的な意見をもっている。(一) この機関紙は「解説的」な性格をもっているのだから、**社会主義**の話がもうすこし多いほうがのぞましい。(二) 戦闘的な政治的スローガンを、もっと緊密に、また直接に第三回大会の**諸決議**や、またわれわれの革命的**社会民主主義派**の戦術の主旨とむすびつけることがのぞましい。

さて、1905年8月24日付の諸君の手紙\*にうつろう。この手紙の調子にはわれわれはみなまったくびっくりした。一、情報について。諸君には「これ以上のことはやれない」という。これは、まちがっている。なぜなら、ブンドにも、メンシェヴィキにも、一連のボリシェヴィキにも、それ以上のことをやれるし、また現にやっていることを、われわれは見ていれば、知ってもいるからである。在外の中央委員がブンド派や『イスクラ』よりも情報につうじていないということは、事実だ。これをあらため、たゆむことなく、うむこともなくあらためていかなければならない。ここにもっとも新しい実例がある。われわれは積極的ボイコットにかんする諸君の決議を**やっとな、三日まえ**に受けとった。ロシアからやってくるものは**六月以来**この決議を知っている！！ それでも、諸君は「これ以上のことはやれない」と言うのか??? 決議のくるのがおくれたため、われわれのあいだには、——私の落度のためではなく——論調の不一致がおこってしまった。なぜなら、私は、諸君がどう解釈している\*\*かを知らないので、『プロレタリー』で「積極的ボイコット」に別の解釈をくだしたからだ。

\* 三名の中央委員（ア・ボグダーノフ、デ・ポストロフスキー、エリ・クラシン）の署名した1905年8月24日（9月6日）付の手紙は、1905年8月14日（新暦）付ヴェ・イ・レーニンの手紙にたいする回答として書かれた（本全集、第34巻、360—361ページを参照）。

\*\* 『中央委員会と国会』という表題で1905年10月3日（9月20日）付新聞『プロレタリー』第19号に掲載された中央委員会の決議案をさす。

つぎに諸君が二つの中央部を復活させたというもう一つの事実がある。実を言えば、不一致は大きなものではなかったが、それでも全党の行動方式の問題では、不一致はのぞましいものではない。(一) 蜂起と臨時革命政府というスローガンを扇動カンパニアの中心項目としてはっきりかかげることは、第三回大会の諸決定の見地からすれば、きわめて重要であり、唯一の正しいやり方であるとおもわれる。(二) 選挙人集会を「力ずくで解散せよ」という勧告は、無条件にまちがっているとおもわれる。これは有害な戦術であろう。

二つに一つである。すなわち、大規模に力を行使するための条件がないか——そのばあいには、扇動、演説、ストライキ、デモンストレーションだけにとどめ、けっして選挙人を「解散させ」ず、彼らを説得しなければならない。それとも、大規模に力を行使するための条件があるか——そのばあいには、この力を選挙人に向けずに、警察と政府に向けなければならない。そのばあいには、蜂起に取りかかりたまえ。そうしないと、諸君はもっともばかげた状態に陥るおそれがある。すなわち、労働者は「力づくで」選挙人を「解散させ」、政府は力づくで選挙人を擁護する！！ここで国会反対の扇動の中心として蜂起という率直で断固たるスローガンをかかげないことからくる弊害が、実際に現れる。蜂起を準備せよ、蜂起を準備するよう、すべてのもの（選挙人をもふくめて）を説得せよ、蜂起の目的、形態、方法、条件、機関、前提を明らかにせよ。力が貯えられていないかぎり、力を不必要に行使してはならない。そして、もし諸君が選挙人を説得しないなら、彼らを力づくで解散させることは、まったく狂気の沙汰であり、社会民主党の自殺である。

第36巻『ロシア社会民主労働党中央委員会へ』P152～153

1905年9月15日